

## 空手道詳説（11）

### 第2章 沖縄史の概説

#### 4 沖縄史の概略（その2. 琉球王国の歩み）

##### (1) 第一尚氏王朝の興隆と滅亡

###### ア 第一尚氏王朝の誕生と王統

約100年間続いた三山対立（鼎立）は、中山の巴志（後に尚巴志）によって1416年に北山王の攀安知（はんあんち、生年不詳～1416年）が、次いで1429年に南山王の他魯每（たるみい、生年不詳～1429年）が滅ぼされて、一人の支配者（王）による琉球国の統一が完成し、国家としての形態は一步前進した。後に、第一尚氏と呼ばれる王統による琉球統一王朝の成立である。

父の思紹を初代王位に就けた巴志は、国土の拡大、城郭の整備を始め、海外交流や貿易の興隆を図るなど、琉球国繁栄の礎が築いたことは、前項の(18)「南山の攻略と琉球王国の完成」のところで詳しく述べた。

巴志が1439年に67歳で世を去ると、在位数年毎に次々と王の交代劇が始まり、王権の維持は次第に足元から危うくなる。

巴志の跡を次男の尚忠（1391～1444年、在位：1439～44年）が第3代王として即位し、明への朝貢に際し馬を貢物として入貢し、他にもジャワ島を始め南方方面との貿易により胡椒、香木、染料などを仕入れ、明、朝鮮、日本などの交易にも力を入れたが、在位わずか5年、54歳で崩じてしまう。

尚忠の跡を世子の尚思達（1408～49年、在位：1444～49年）が第4代王となるが、思達も在位5年で薨去した。

思達没後の第5代王には、尚巴志の五男の尚金福（1398～1453年、在位：1449～1453年）即位する。尚金福の功績として挙げられるのは、尚巴志時代に着工した土木工事の完成であった。

現在の那覇は本島の一部となっているが、それまで島南部を流れる二つの河川口に散在する浮島の一つで、小さな港湾であった。これを本島とつないで貿易港とし

て整備完成したのである。加えて、那覇から「長虹堤」と呼ばれる長さ約1kmの堤道を完成(1451年)させ、首里との道を繋ぐことに成功する。今でいうインフラ整備の一つと言えよう。しかし、金福も在位4年、55歳で崩じてしまう。

金福の亡き後を、世子の志魯と金福の弟(巴志の六男)の布里の間で、王位をめぐって争った「志魯・布里の乱」(しろ・ふりのらん)が起き、この乱によって首里城は焼失し、志魯・布里の双方が共倒れとなって死んでしまった。

そのため王位は尚忠王、尚金福王、そして布里らの弟で七男の泰久(1415~60年、在位:1453~1460年)が第6代王を継ぐことになるが、この即位については次の経緯を見逃すことできない。後に詳しく述べる第二尚氏王朝を樹立する金丸(かなまる、後の尚円王)の登場である。

泰久は、越来(ごえく)間切(現在の沖縄市越来)を与えられ越来王子と称していた。王子は、沖縄本島の北西に位置する伊是名島生まれで農民出身の金丸に注目して取り立て、後に第5代王の尚思達に王府官僚として推薦した。金丸は、思達王からも信望を得て高官の一人にまで昇進する。

尚金福王が死去した後の「志魯・布里の乱」を経て、泰久は金丸らに推されて第6代王となった。

泰久が即位すると、金丸は景泰5年(1454年)に西原間切の内間領主に任命され、仕官14年目にして自らの領地を有するまでに出世したのである。

泰久が王になってから、明の「永楽通宝」を変造して「大世通宝」(たいせいとうほう)という銅銭を作成し、又1458年に「万国津梁の鐘」(ばんこくしんりょうのかね)を鑄造し、首里城正殿前に掲げさせた。右の写真はその鐘で、この鐘には、沖縄相国寺の溪隱(けいいん)和尚の撰文による銘文(めいもん)が刻まれており、1978年に国指定の重要文化財に指定され、県立博物館に保管されている。



万国津梁の鐘

鐘の大きさは、高さ 154.9 センチ、口径 93.1 センチ、重さ 721 キロで、鐘の銘文の「万国津梁」とは、世界を結ぶ架け橋の意味である。鑄造した鑄物師は [大工・藤原国善] と記されているが、北九州方面から招かれたようである。

この銘文の文言は、沖縄県庁知事公室に石垣島出身の書家・茅原南龍（1939 年～）氏の作品として屏風仕立てとなっており、仲井眞弘多（なかいま ひろかず、1939 年～）沖縄県知事が記者会見の時など、いつもバックに出てくるから記憶に残っている方も多いのではないかと思う。素晴らしい風格ある楷書作品である。



沖縄県庁知事公室にある「万国津梁の鐘」銘文

では、なぜ筆者が「万国津梁の鐘」の銘文を取り上げているのか。ここに記される文面から、尚泰久が琉球国統治の理想として標榜する心と眼差しが浮かび上がり、泰久時代の琉球人の人間性を伺い知ることができると思われ、それに空手道精神と無関係でないと思ったからである。

次に漢文で書かれた文章と、書き下し文を掲載する。この書き下し文については、沖縄県知事公室広報課によるもの。



仲井眞弘多沖縄県知事

《鐘銘原文》	《書き下し文》
琉球国者南海勝地而 鍾三韓之秀以大明為 輔車以日域為唇齒在 此二中間湧出之蓬萊 島也以舟楫為万国之 津梁異産至宝充滿十 方利地靈人物遠扇和	琉球国は南海の勝地にして 三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車（ほしや）となし、 日域を以て唇齒（しんし）となして、 此の二つの中間にありて湧出せる蓬萊（ほうらい）島なり 舟楫（しゅうしゅう）を以て万国の津梁（しんりょう）となし、 異産至宝は十方利（さつ）に充滿し、 地靈人物は遠く和夏の仁風を扇ぐ。
夏之仁風故吾 王大世主庚寅慶生尚泰久茲 承宝位於高天育蒼生 於厚地為興隆三宝報 酬四恩新鑄巨鐘以就 本州中山国王殿前掛 着之定憲章于三代之	故に吾が王、大世（おおよ）の主、庚寅（かのえのとら）に慶生す。 尚泰久（しょうたいきゅう）なり。 茲（ここ）に、宝位を高天に承（う）け、蒼生（そうせい）を厚地に 育む。 三宝を興隆し、四恩に報酬せんがために、 新たに巨鐘を鑄（い）て、 以て本州中山国王殿の前に就（つ）け、これを掛着（かいちやく） す。 憲章を三代の後より定め、
後※文武于百王之前 下濟三界群生上祝万 歳宝位辱命相国住持 溪隱安潜叟求銘々曰 須弥南畔 世界洪宏 吾王出現 濟苦衆生 截流玉象 吼月華鯨	文武を百王の前よりあつめ、 下は三界の群生（ぐんせい）を濟（すく）ひ、上は万歳の宝位を祝 ふ。 辱（かたじ）けなくも、相国の住持 溪隱安潜叟（けいいんあんせいそう）に命じて、銘を求む。銘に曰く。 須弥（しゆみ）の南畔、世界洪宏（こうこう）たり。 吾が王出現して、苦しめる衆生（しゅうせい）を濟ふ。 流れを截（た）つ玉象、月に吼（ほ）ゆる華鯨（かげい）、
泛溢四海 震梵音声 覺長夜夢 輸感天誠 堯風永扇 舜日益明 戊寅六月十九日辛亥	四海に泛溢（はんいつ）し、梵音声（ぼんおんじょう）を震はし、 長夜の夢を覚まし、感天の誠を輸（いた）す。 堯風（きょうふう）は永く扇ぎ、舜日（しゅんじつ）は益ます明らかな り。 戊寅（つちのえとら）のとしの六月十九日辛亥（かのとい）のひ
大工藤原国善 住相国溪隱叟誌之	大工 藤原国善 住相国溪隱叟、これを誌（しる）す。

琉球王国について、南海の素晴らしい地にあつて中国、朝鮮、日本の各国と密接な関係を持ち、これらの国の中間に位置する大地から出現した憧れの島(蓬萊の島)

である。船で各国へ渡り、万国の架け橋となり異国の産物や貴重な品々は、国中に満ちあふれ、土地柄も人々の心も遠く日本や中国のすぐれた徳の教化（三宝、四恩）をまねく。更に文武両道を柱とし、民衆救済と王国の長く栄えらんことを願う気持ちが伝わってくる。

筆者の私見であるが、15世紀の尚泰久という琉球王の願いは、555年を経た今に至って達成されているとは言い難い。

沖縄県の人たちの思いを理解する上でも、もっと琉球の歴史について知ることが大事であって、空手道精神の中にも同様の思想が包含されていると確信する。

## (2) 第一尚氏王統最後の王

泰久が在位7年45歳で没すると、泰久三男の徳（1441～69年、在位：1460～69年）が20歳で第7代王となり、翌年、明より冊封を受けた。

尚徳は妾腹であった。長兄の金橋王子の母は王妃であったが、讒言から謀反の嫌疑をかけられた護佐丸（身の潔白を称え、妻子と共に自害）の娘であったことから、即位できなかつたと見られている。

尚徳の世は、中国交易を中心としながら市場拡大を図り、北は日本、朝鮮、南はマラッカ、シャムと、琉球国は大交易時代という時勢にあった。

ところが、血気にはやる若き王に対し、金丸は諫めることしばしばであったが、当然ながら尚泰久王の時代のようにはならなかった。史書（球陽）には、尚徳王の悪政が綴られるが真偽の程は定かでない。

いずれにしろ尚徳の専横政治は、1466年には王自ら2000人の兵を率い奄美の東方・喜界島（きかいじま）に討伐遠征して国土に加え、他にも無謀とも思える政策を繰り返したため財政は逼迫し、次第に重臣たちの信頼を失っていった。

このような情勢の中、1468年8月金丸（54歳）は自ら身を引き、ついに内間村に隠遁してしまった。

翌1469年4月、尚徳王が28歳で病死する。

法司（三司官）たちは、重臣を招集し佐敷王子である幼少の世子を即位させようと会議を開いた。その評議の中で、重臣の一人である安里大親（あさとうふや）が突然神懸かりして、『虎ぬ子や虎、悪王ぬ子や悪王。物呉（ものく）ゆすど我御主（わがうすう）、内間御鎖（うちまうざし）ど我御主』（虎の子は長ずれば猛獣の虎となり、悪王の子は所詮悪王となろう。財貨を与えてくれる者こそ我が主であり、それは内間金丸さまである）と謡いだした。それを聞いた一同は「ヤーサーレー、ヤーサーレー」（その通り）と唱和して、金丸を王に推すことが決定したという。

金丸は隠遁先から首里に迎えられて即位し、尚円と名乗る。これが第二尚氏王統な始まりとなった。

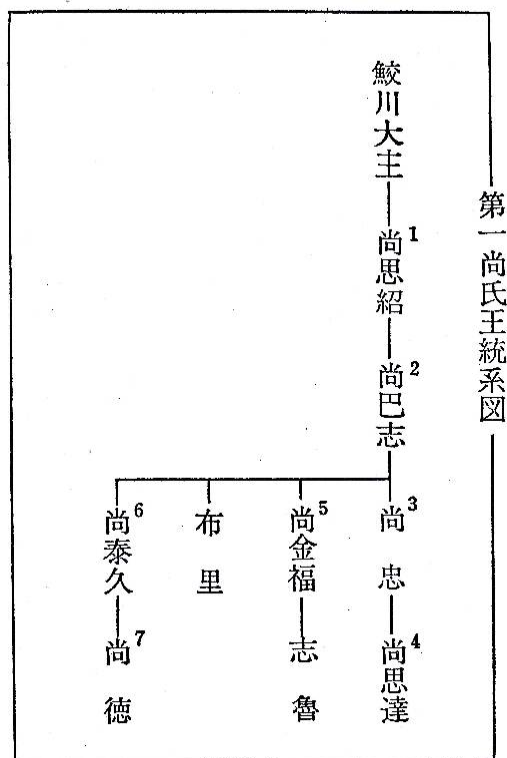
尚徳の死を巡る異聞によれば、次の話がある。

『尚徳は、琉球の創世神アマミキヨが天から降りてきて、国造りを始めたと伝わる聖地の久高島（沖縄本島東南端、知念岬の東海上5.3kmにある）参詣に出向き、そこで外間家の美少女の祭司（ノロ）クニチャサに心を奪われ、寵愛のあまりに帰

還を忘れてしまい、その隙に首里で金丸による謀叛が起こった。尚徳は異変を察知して首里に戻ろうとしたが、船で一里（4 km弱）も進まないうちに、行き合わせた漁船から王家一族の虐殺と、金丸が王に即位したと聞いて、憤って海に身を投じて死んだ』という。

これが真実とは思えないが、尚徳王にはこんな話が出るほど、無能の噂がつきまとったようである。遂に、第一尚氏の王統はここに滅亡した。

### (3) 第一尚氏王統の系譜と在位年



「沖縄の歴史」（宮城栄昌著）57 頁から

#### 第一尚氏王統の在位年

王代	漢字名	生 没 年	没 齢	在 位 年	在位年数	冊封使の渡来年
初代	尚思紹	1354～1421 年	67 歳	1406～21 年	15 年	1407 年
二代	尚巴志	1372～1439 年	67 歳	1421～39 年	18 年	1425 年
三代	尚 忠	1391～1444 年	53 歳	1439～44 年	5 年	1442 年
四代	尚思達	1408～1449 年	40 歳	1444～49 年	5 年	1447 年
五代	尚金福	1398～1453 年	55 歳	1449～53 年	4 年	1452 年
六代	尚泰久	1415～1460 年	45 歳	1453～60 年	7 年	1456 年
七代	尚 徳	1441～1469 年	28 歳	1460～69 年	9 年	1462 年

※ 冊封使の渡来年は、池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」6 頁から。

#### (4) 第一尚氏王統が残したもの

巴志の働きによる三山統一は、琉球国史（沖縄史）に画期的な改革をもたらした。加えて、近代化へと一歩前進したこと誰しも異論はなかろう。

中山王の専制的な支配権は次第に増大し、強力となって周囲を圧倒し国土も広がった。

首里の王城は、支配者の権威を示すため整備拡張されて権勢を示す体裁を整え、それまで浮島だった那覇と首里がつながったことにより、明国、日本、朝鮮、南方諸国との貿易の利便が図られ、人民の往来や物資の流通に資した。当時としては大きな土木事業として、「公卿太夫から土民に至るまで、昼夜石塊を担いで完成した」と記録に残るから、大多数の人民を動員できる権力の増大があったと推察できる。

一方、思紹の15年、尚巴志の18年と安定した統治の時代は、巴志の死をもって絶大だったカリスマ性は消滅し、その後王位に就いた尚忠から尚徳までの約30年間に、5人の王が交替するという異常事態となったが、尚徳の28歳を除けば、他は当時の平均寿命は生きた訳で、どうしても仕方ない現象だったと言えなくもない。

ここまで琉球史を辿ってきて既に気付いていると思うが、王朝の交替には大きな戦闘・闘争が少なかったことである。しいて挙げるならば、巴志の三山統一の時、北山王の攀安知との戦いが目立つ程度で、後に尾を引くような大きな戦いはなかったと推察できる。

その理由として、極めて狭く限られた島国の中で、民意とか衆議による決定法の原始的な形態が優先された可能性を否定できない。日本本土ならあり得ない現象であり、得策を選択した立地的、歴史的背景の相違を観ることできる。

後になり、第二尚氏王統第3代の尚眞王（以下、「尚眞」と記す。1465～1527年、在位：1477～1527年）の代になって、「禁武政策」を受け入れた事実も念頭に置き、これからの考察を進めることにしたい。

金丸、後の尚円王の即位にしても、クーデターではなく正規な会議（閣議のようなもの）によって選任されたと見てよい。

(つづく)

今月の参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、株勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、株河出書房新社発行